
鑑定屋

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鑑定屋

【コード】

N3430V

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

あなたの命の価値、鑑定します。

俺には生きる価値がない。ゴミ以下の存在だ。

そんな思考が常に頭の隅にあつて、俺はいつも、自分をゴミ箱に捨てる方法を考えていた。考え始めたのはいつからだろうか。……ぼんやりと考え始めたのは、中学生の頃だった気がする。

とにかく俺には価値がない。地元で一番頭のいい高校に行っても、一流の大学を卒業しても、一流企業に入って期待の新人と言われると、それは一緒だ。

俺自身は空っぽなのだ。昔から。

「鑑定屋……？」

俺がその店を見つけたのは、本当に偶然だった。会社からの帰り道、俺は少しだけ気分を変えようとして、いつもは通らないような細い路地裏を歩いていた。細い路地なのに青色のポリバケツ、つまりゴミ箱が点々と置かれていて、かなり歩きづらい。

人目に付かないこのゴミ箱に、自分も捨てられたらいいのに……なんて考えていたところだった。

清潔だとは言いがたいその細い路地に、爺さんが座り込んでいるのを見つけたのだ。気分でも悪いのかと思ったが、ちゃっかりと^{okc}莫座を敷いている。まるでそこが、自分の家ですよと言わんばかりに。実際、そこはその爺さんの家ではなくて、店だったわけだが。

煤^{すす}けた青色の甚平を着た爺さんの横にある、鮮やかな水色のゴミ箱。そこに、セロハンテープで紙が貼られている。まるで、「冷やし中華はじめました」の貼り紙のようなその紙には、こう書かれていた。

『鑑定屋 あなたの命の価値、鑑定します 』

「爺さん。これ、まじ?」

俺が声をかけると、爺さんはゆっくりと顔をあげた。爺さんと言っても、60代後半くらいだろうか。爺さんは俺の顔を見て、それからしばらく俺の顔を直視して、やがてにんやりと笑った。前歯が1本、抜けていた。

「まじ、ですよ」

ゆっくりとした口調の、爺さんのしゃがれ声。俺は頭をぼりぼりと搔いてから、爺さんの前にしゃがみこんだ。それから、挑発的に言った。

「じゃあ、俺の命の値段、鑑定してよ」

この爺さんの言うことは分かっている。どうせ、「人の命の価値なんて、計り知れない! この世に価値のない命なんてない!」とか何とか言っでごまかす気だろう。そんな言葉で感動する奴もいるんだから、この世界は馬鹿げている。俺はお爺さんの顔を見ながら、鼻で笑った。

「それでは、あなたは私のお客様ということですよ。よろしいでしょうか?」

「へいへい、よろしいよ」

俺が投げやりに言うと、爺さんはまたもやにんやりと笑った。よく見ると、歯が黄ばんでいる。ちゃんと毎日、歯を磨いているんだろっか。

「それでは、鑑定させていただきます」

爺さんは俺の顔を、というか、俺の瞳をじっと見つめた。だんだ

んと爺さんの顔が、俺の方に近づいてくる。おいおい、そんなに直視するなよ。

やがて爺さんは顔を近づけるのを辞め、それから最初の姿勢に戻った。少し猫背気味の爺さんは、ただでさえ小柄なのにさらに小さく見えた。

「鑑定、できたのかよ？」

へらへらと笑いながら俺が言うと、爺さんは頷いた。さ、いくらって言うかな？ 地球の重さよりも重いつか言っちゃうかな？

「で、俺はいくらだ？」

俺が訊くと爺さんはにんやりと笑い、それからはっきりと言った。

「10000円、です」

爺さんの告げた値段を、俺は頭の中で反芻した。10000円。千円。……せんえん？

呆然としている俺の顔を見ながら、爺さんはへらへらと笑っている。前歯の欠けているのが目立つ笑顔で。

「……10000円って、言ったか？」

万、もしくは億という単位を聞き逃したのかと思って、俺は訊き直した。しかし爺さんは俺の質問を聴いて、何故か満足そうに大きく頷いた。

「10000円、と言いました」

「マジで？」

「マジです」

おいおい何言ってるんだこの爺さんは。バイトの時給なら良い方が、人間の命の値段が10000円だなんて、安すぎるにもほどがあるだろ。

しかし、だ。俺は考える。俺は自分の命に、価値なんてないと思ってた。むしろ、マイナスなんじゃないかと思ってた。そう考える

と、10000円の価値があるだけ、まだマシなのかもしれない。

「その10000円ってというのは、どこから出てきたんだ？ なんて10000円？」

興味本位で俺は尋ねた。頭の中では、野口英世の顔がちらついている。

爺さんは困ったなあという様子で、首をかしげた。それから、言った。

「鑑定料がね、1人につき10000円なんですよ。だから、私にとってあなたは10000円の価値があります。お客様ですから。しかしあなたは、今まで会ったこともないような赤の他人だ。だから、10000円の価値しかない」

そこで一度言葉を切って、爺さんはにんやりと笑った。

「あくまで私にとっては、の話ですがね」

呆けている俺に、爺さんが語り始める。

「1万円札には1万円の価値がある。しかし、そうですねえ。……例えば、あなたが困窮しているとしましょう。明日のご飯代すらないくらいにね。そんな時、同じくお金に困ってる友達が、あなたに1万円をくれた。その場合、あなたにとってその1万円札は、1万円の価値しかありませんか？」

「………」

「違う例え話をしましょう。あなたには、とても大切にしている壺があった。自分の大好きなお爺さんがくれた、大切な壺です。お爺さんが言うには、その壺は1億円の価値があるらしい。しかしあなたはその壺の本当の価値も知らず、ただただ大切にしていました。ところがある日、どこかの鑑定士がやってきて、『この壺は偽物だ。ガラクタ程の価値もない』と言ってきた。するとあなたにとってその壺は、途端にガラクタになりますか？」

「………」

「答えは人それぞれでしょう。けれどね、もしも私がそう言われたとしても、私にとってはその壺はガラクタにはならない。お爺さんがくれた大切な壺です。大切な、ままです」

爺さんはそう言うてから、もそもぞと身体を動かし座りなおした。「もしも私の家族がこの店に鑑定に来たら、その時は私は1000円だなんて言わないでしょう。もっと、……それこそ、価値なんて付けられないかもしれない」

俺の顔を見て、爺さんはにんやりした。どうも、この笑い方は爺さんの癖らしい。

「価値なんて、人それぞれだということです。ある人にとってはガラクタでも、ある人にとってはお宝。その逆も然り^{しか}」

そう言うてから爺さんは、複雑な顔をしている俺の眼を覗きこんだ。

「私にとってあなたは1000円。では、あなたの家族にとって、友達にとって、……あなたはいくらなんでしょうね?」

カビ臭い風が、俺と爺さんの間を通り抜けた。しばらく呆けていた俺は、やがて思いついたように爺さんに言った。

「爺さんのは極論だな。ってことは、なんだ? 爺さんにとって、お客様でも何でもない他人は0円ってことか? 他人の命には全く価値がないって? おかしいだろ、そんなの」

俺の言葉を聞いて、爺さんが声を出して笑う。嬉しそうに。

「言えたじゃないですか」

「あ?」

「あなた、自分のことをいくらだと思ってます?」

「え……」

「人の命に価値がないのは、おかしいんでしょう?」

爺さんの嬉しそうな顔を見て、素直に『やられた』と思った。揚げ足を取られて派手に転んだ気分、俺は爺さんの嬉しそうな顔を

見つめた。爺さんは猫背気味の背中をさらに丸めて、くつくつと笑っている。

「あなたにとって、あなたは0円。私にとっては1000円。他の人にとってはどうでしょう」

「……知らねえよ」

「価値は、その人自身で決めればいい。私にとってあなたは1000円。さっきまでは、ね」

湿気とカビのにおいを乗せた風が、勢いよく吹きぬける。『鑑定屋』の貼り紙が、バサバサと音を立てた。

「……俺の値段。今は、いくらなんだ？」

「それは秘密です。が、」

爺さんは嬉しそうに、貼り紙を貼ってある水色のゴミ箱をこつこつと叩いた。

「簡単にこの中に捨てるような、そんな価値ではないですね」

そう言って、眼を細めた。

爺さんに1000円札を渡すと、爺さんはそれを大事そうに懐にしまった。それから、

「私の鑑定。あなたにとって、1000円の価値はありました？」

俺はにんやりと笑う爺さんの眼を見て、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3430v/>

鑑定屋

2011年7月31日03時21分発行